特集

懐かしくて新しい、三重の銭湯

江戸時代に一般大衆に広まったという銭湯は、一般家庭にお風呂が普及して以降、急速にその姿を消しつつあります。

しかし近年では、大きな浴槽に浸かることで得られる精神的充足感・幸福感に加えて、美容や健康効果があることから、その価値が見直されつつあります。また、昭和の面影を残す銭湯の外観や内装などが、若い世代に新鮮に映り、その魅力が再認識されています。

今回は、三重県内で営業を続ける銭湯の中から、6施設をご紹介します。

＊銭湯を利用する場合は、湯船に入る前に体の汚れを落とす、タオルをお風呂に入れない、浴場内で洗濯をしない、シャワーをする時には座る、浴場から外に出る際には体をよく拭くなどのマナーを守るようにしましょう。また、体調不良や泥酔した状態での入浴は危険なため、控えるようにしましょう。

＊各銭湯の営業日時、入浴時間、料金、受け入れ方法、人数などには違いがあり、状況に応じて休館・閉館する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村 真由美・中村 元美・堀口 裕世
撮影……梅川 紀彦・尾之内 孝昭・中村 元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

「楠温泉」（四日市市楠町）

色とりどりのタイルやレトロな内装に心和む

楠温泉

【四日市市楠町】

鈴鹿川河口の三角州に位置する楠町では、かつては漁業が盛んに行われていました。「以前は、漁を終えた漁師たちや、近くの紡績工場の従業員たちが汗を洗い流しに来ていたようです」と教えてくれるのは、池田 久司さん。昭和8（1933）年の開業以来、地域の人々に親しまれている銭湯「楠温泉」の3代目でいらっしゃいます。会社員だった池田さんが3代目となったのは、5年前。2代目の森下 晃行さんが体調を崩したため、後を受け継ぐことにしたのは、ごく自然の流れだったと回想します。

池田さんの案内で館内に入った途端、郷愁を覚えました。木札の鍵が付いた下駄箱、天井の洋風ライト、和洋折衷の「組格子の欄間」など、開業当時の姿をほとんど変えていないのです。

90年以上もの間、大切に使用されてきたのは、浴場内も同様です。壁や浴槽周囲には、カラフルなタイルが敷き詰められ、明るく可愛らしい印象です。「3分の2は常連客ですが、最近では若いお客さんも増えてきました」と池田さん。中には「鈴鹿サーキット」や伊勢神宮参拝の帰路に立ち寄る人もいると伺いました。

浴場内の花柄タイルに彩られた大きな浴槽は3か所に区切られ、37度から44度までの3段階の温度に分けられています。好みや体調によって入る浴槽を選ぶことが可能です。小規模ながら、水風呂やサウナも揃うため、幅広い年代の方が体も心も癒すことができるでしょう。

池田さんからは、県外からタイル好きの人が来館することもあると伺いました。レトロな内装に加えて、花柄や幾何学模様のタイルを眺めながら入浴すれば、疲れも吹き飛ぶことでしょう。

池田 久司さん

「楠温泉」外観

昭和の趣を伝える洋風ライト

木札がアクセントの下駄箱

タイルに彩られた浴槽

お問い合わせ

「楠温泉」（月曜日定休）
TEL 059-397-2328
営業時間／15時30分～21時
駐車場あり（15台）

バリエーション豊かな湯と〝看板おばあちゃん〟
すえひろ湯

【津市幸町】

白いタイルの壁と長い浴槽の浴室

広い駐車場がある津市の「すえひろ湯」は、住宅街の中にあります。入り口を入るとソファーのあるロビー。ソファーの周囲にはカーペットが敷かれ、いろいろなおもちゃやマンガなどが置かれ、アットホームな安らげる空間となっています。男性も女性も、湯上がりや入浴前に話に花を咲かせ、くつろぐ方が多いとか。

ロビーの右手中央に料金を払う番台（フロント形式）があり、この左右が、男女に分かれた入り口となっています。

脱衣所からお風呂場に入ると、白いタイル張りですっきりした印象。床は滑りにくい素材でお年寄りにも安心です。真新しい建物ではありませんが清潔で、細やかに手を掛けられているのが感じられます。男女ともに、打たせ湯、寝風呂、超音波、電気風呂などがあり、バリエーション豊か。お湯はブラックシリカ入りなので、湯上がりもポカポカでしょう。

ご主人の米田 幸二さんにお話を聞くと、「創業は昭和27（1952）年です。祖母と伯父がはじめ、その後父が継ぎました。私は、ずっと電気工事士の仕事をしていたのですが、平成8（1996）年に父が病気で倒れてから店を引き継ぎました。今は、母と家内（奈緒美さん）と三人でやっています」とのこと。このお母さんが看板娘ならぬ〝看板おばあちゃん〟として人気のあき子さん。昭和33（1958）年に19歳で嫁いできて以来、85歳の現在まで、ずっと番台に座ってきました。「今では、おばあちゃんがいないと、何人ものお客さんが『おばあちゃんは？』と聞いてくれるほどです」。

あき子さんの相棒を務めるのは、チワワのココちゃん。13歳の〝看板犬〟です。夕方6時頃から2時間ほど番台に座り、お客さんを出迎えます。あき子さんやココちゃんに会うために来てくれるお客さんも少なくないそうです。

壁には演歌歌手の山崎 ていじさんのサイン入りのポスターが貼られていて、聞けば、あき子さんがファンで親交があるとのこと。愛犬のココちゃんを隣に、ていじさんのポスターを眺めながら、にこやかにお客さんとの会話を楽しむあき子さんです。

「冬は水が冷たいですから、朝9時から湯を沸かしはじめ、3日に一度は薪用の廃材を切らなければならないなど、銭湯はきつい仕事が多いのですが、おばあちゃんが元気で今も薪を一輪車で運ぶような仕事もしてくれるのでありがたいです」と幸二さん。

昔ながらの銭湯らしい気さくで和やかな雰囲気と、家族3人の細やかな心遣いがあふれる「すえひろ湯」。ほっこりさっぱりできると、常連さんが多いのがうなずける銭湯です。

お問い合わせ

「すえひろ湯」（木曜日定休）
TEL 059-228-0531
営業時間／15時30分～23時30分
駐車場あり（26台）

米田 幸二さん

母のあき子さんとココちゃん

「すえひろ湯」はオレンジ色の外壁が目印

くつろぎの場となるロビー

脱衣所はすっきり

電気風呂、超音波などが並ぶ浴槽

木造からビルに改装後も昔ながらの銭湯スタイル

国分湯

【津市南中央】

中央に湯船が置かれたスタイル

ビルの壁面に描かれた温泉マークが目印の「国分湯」は、津市のバイパス、県道114号沿いの立ち寄りやすい場所にあります。ご主人の桐生 浩伸さんの父、守男さんが昭和35(1960)年に木造平屋建ての銭湯からスタートさせました。屋号は守男さんの故郷、鈴鹿市国分町から名付けたそうです。昭和63(1988)年、マンションの建設で一階部分に銭湯を建て替え、県内ではめずらしいビル銭湯になりました。

その外観から現代的な銭湯を想像して暖簾(のれん)をくぐると、そこには昔ながらの銭湯美。男女別の入り口から戸を開けると、番台と脱衣所が一体化したスタイルです。銭湯定番の〝お釜形ドライヤー〟(女性用)とアナログスケールの体重計、鏡の提供広告が郷愁をそそります。

浴室も期待を裏切らずに、真ん中にどっしりと湯船が置かれたレトロな光景です。奥には電気風呂、気泡風呂はジェットバスとバブルバスの浴槽で、いろいろと湯浴みを楽しめます。広々としたスペースに、積み上げた湯桶はカラフル。全体の配色のバランスが絶妙で、床の水色のタイルと壁の白タイルがモダンで明るい雰囲気です。暗くなる前には窓から差し込む太陽の光で、さらに爽やかな開放感を得られます。

タイル張りは改装以降、そのままの状態で使い続けていますが、年季の入ったタイルゆえ、強力ジェット洗浄には向いておらず、桐生さんは浴室を丁寧に時間をかけて手洗いしています。「営業が終わってから、ゴシゴシ。一度手を抜いて

桐生 浩伸さん

さぼってしまうと、その汚れはもう落ちませんからね」と、その日のうちに洗い流すことを怠らないこそ、これほど清潔感にあふれているのです。

浴槽を磨いた後に、タオルなどの洗濯を終えるまでがその日のノルマ。翌日に脱衣場を掃除し、そしてお客さんを迎えるべく、水を張ってボイラーのスイッチをいれます。平成26(2014)年に、ボイラーの燃料は薪から重油へと変更されました。「昔に比べたら、ずいぶん便利になりましたよ」と淡々と日々の業務をこなす桐生さん。

常連さんとの会話は軽やかです。取材対応中も訪れた人、帰る人、一人ひとりにあいさつを欠かさない桐生さん。毎日訪れるご夫婦は、風呂上がりにアイスクリームを食べるのがお決まりで、高齢の方が湯船で長湯をしていると「そろそろ上がった方がいいよ」と声をかけています。ご近所さんばかりでなく、津へ働きに来ている遠方の人が、仕事帰りに寄るパターンも。駐車場はマンション周辺にも借りて対応しています。

はじめて訪れた若い利用者は「三重銭湯めぐりデジタルスタンプラリー」を楽しんでいました。「はじまって一か月も経ってないけど全部まわったって人もいましたね」。続けて桐生さんは話します。「今は週休2日にさせてもらいましたが、ここが定休日になると常連さんは別のお風呂へ行くみたいです。一度銭湯の良さを知ってしまうと家の風呂には戻れんでしょう」。国分湯も近くの銭湯が定休日になると、いつも以上に賑わいます。津市にある4軒の銭湯には、持ちつ持たれつの関係性ができているようです。

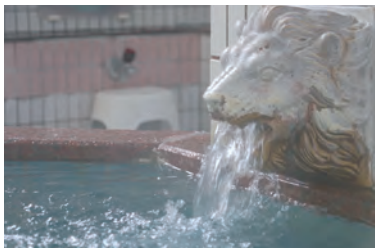
お問い合わせ

「国分湯」(月曜・金曜日定休)
TEL 059-227-7816
営業時間/16時～22時
駐車場あり(20台)

県道114号沿いにある

ビルの1階が銭湯

レトロ器具の揃う脱衣所



適温でリラックス

カラフルな湯桶

山のタイル絵と〝かあちゃん〟の笑顔に癒される
春日温泉
【松阪市春日町】

男湯は富士山のタイル絵

松阪競輪場のすぐそばに立つ「春日温泉」。入り口で出迎えてくれていたのは、経営者の吉村 きみ子さん。明るい笑顔のやさしいおかみさんです。「創業は、昭和31（1956）年頃と聞いています。私がお嫁にきたときには、主人の父が銭湯を経営していました。22歳で嫁いできてから、83歳の今まで、ずっとこの銭湯で働いてきました」と、半生を振り返ります。「昔は松阪だけでも何十軒も銭湯があって、組合で連休の日を決めて、皆でバス旅行に行ったりしたものです。今ではもう、うちだけになってしまいました」。

その言葉通り、「春日温泉」は松阪市内で唯一の銭湯となりました。

吉村 きみ子さん

銭湯経営はすることが多く忙しいのですが、家族で助け合って続けてこられたそうです。「主人は昼間は勤めに行き、夜はおじいさんを手伝っていました。今、長男も不動産業の仕事をしていて銭湯を継ぐ気持ちはないのですが、私がこの仕事をしている間だけはと言って手伝ってくれています。でも、私も高齢ですし、それだけでは手が足りませんから、釜焚きと掃除は手伝いの人に来てもらっています。私は人に恵まれていて、今来てくれている二人も、本当によく働いてくれますし、お客さんにも助けられているんですよ」。小柄なきみ子さんを気遣って、入り口の暖簾は、毎日お客さんが掛けてくれます。また、冷蔵庫や女湯に置かれたソファなどはお客さんが運んできてくれたもの。「みんな〝かあちゃん〟などと呼んで親切にしてくれます」。

壁を飾る大きなタイル絵は、男湯は富士山、女湯はアルプスを思わせる山の夕景。広々とした風景画は開放感があり、まさに「お風呂屋さん」のイメージ通り。お湯は、ボイラーと屋根の上に大きく広がるソーラーパネルで沸かします。天然鉱石を入れた「ミネラル湯」で、手前の浴槽はぬるめ、中央は熱い湯が沸きだすようになっており、奥は超音波の湯。サウナもあり、男湯は水風呂、女湯は薬湯で〝整う〟ことができます。

脱衣所には、丸い縦型の表示板が付いた体重計や、頭上で回転する〝お釜形ドライヤー〟（3分10円 女湯のみ）など、昭和の面影が漂う懐かしい品々も並んでいます。「女湯の脱衣所にあるソファでの井戸端会議が楽しみなんですよ。食べ物の話や健康のことなど、あれこれ話します。しばらく顔を見ないと気にしていたお年寄りが『介護施設のデーサービスでお風呂に入ってる』と聞いて安心したり、お客さんはみんな大きな家族のような気持ちですね」。

一日の終わり、やんわりとぬるめのお湯に浸かって山の絵を眺め、おかみさんの笑顔に会えば、身も心も癒されます。

お問い合わせ

「春日温泉」（水曜日定休）
TEL 0598-21-0568
営業時間／15時30分～22時30分
駐車場あり（8台）

女湯は夕映えの山の風景

男湯の暖簾。女湯の入り口は反対側に

ソーラーパネルと煙突

木札の鍵が懐かしい下駄箱

人気のサウナは男女両方にある

女湯の脱衣所は憩いの場に

地域住民に愛され続け100年
錦水（きんすい）湯
【伊勢市岩渕】

すっきりと清潔感ある浴場

創業100周年記念の手ぬぐい

近鉄宇治山田駅から勢田川をわたってすぐ。白い煙がモクモクと立ち上る煙突を目印に進むと赤い屋根の銭湯・「錦水湯」があります。創業は大正13（1924）年。昨年、創業100年を迎えました。ご主人の竹林 茂さん・尚美さん夫妻は4代目。竹林さんの祖父がはじめました。多い時は市内に45軒ほどあった銭湯もここ数年で廃業が相次ぎ、現在は市内で2軒となりました。

現在の建物は平成元（1989）年に建て替えられたもの。清潔で居心地がよい脱衣所では、年季の入った「ぶら下がり健康器」や頭にかぶって乾かす〝お釜形ドライヤー〟が昭和感を漂わせています。すっきりとした白いタイルが美しい浴槽では、銭湯には珍しいペンギンの置物が入浴客を見守っています。湯は地下水を汲み上げた井戸水を使用し、湯を沸かす燃料はおがくず、薪、木材チップなど。客からは「お湯が柔らかく、体が芯から暖まる。朝までぐっすり寝られる」と好評です。

季節替わりの薬湯やジェットバス、電気風呂など多彩な湯を楽しめるのも魅力。利用者は1日平均100人。近隣住民を中心に市内から車で訪れる人も多く、土日は観光客が訪れることもあります。スチームサウナと水風呂も備え、近年のサウナブームで若い客も増えているといいます。

尚美さん

竹林 茂さん

「毎日来てくれる人もいますね」と竹林さん。銭湯を訪れる理由はいろいろあります。家に風呂がない、風呂の準備が大変だから、大きな浴槽で足を伸ばしたい、誰かと話したい―。特に一人暮らしの高齢者などは「ここに来てなじみの客と話すのが唯一の楽しみ」だと語る人も多いといいます。また「しばらく顔を見ないと心配になる」と尚美さん。常連は毎日顔を合わせる〝家族〟のような関係性で、客同士で背中を流し合ったり、親子ほどの年齢差のある客同士がお互い気にかけ合うこともあるそうです。近年、高齢者が浴室内で倒れる事故などがニュースになっています。銭湯でもものぼせて意識を失うなど、体調が悪くなる人もいますが、必ずいつも周囲の人が助けてくれます。見守り、見守られている安心感があり、また憩いの場としても欠かせない場所となっています。

竹林さんの仕事は午前10時半の釜の焚き付けから始まります。オープンの午後2時前には一番風呂を楽しみに待つ常連の姿があります。それから深夜0時の営業終了まで夫婦が交替で番台に座ります。清掃などをして一日の仕事を終える頃には午前2時をまわります。「『ブラック』な仕事ですよ」と苦笑いされますが「いくら大変でも、必要としてくれる人がいるからやめるわけにはいけない」と語ります。地域の人が集い、心身を癒す憩いの場を守り続けています。

湯を沸かすボイラー

お問い合わせ

「錦水湯」（金曜日定休）
TEL 0596-28-7360
営業時間／14時～24時
駐車場あり（15台）

勢田川沿いに建つ

暖簾が風にたなびく

現役の〝お釜形ドライヤー〟

浴場の隅にたたずむ親子ペンギン

スチームサウナも人気

火の神とともに名張のまちを見守る 県最古の銭湯 新町温泉【名張市新町】

京都式で壁沿いに浴槽を配置

名張川沿いの初瀬街道には伝統的な味わい深い建築物が並んでいます。その本町通りから、〝ひやわい〟と呼ばれる狭い路地を抜け、推理作家・江戸川乱歩の生誕地のすぐ近くに、ちょこんと突き出た煙突あり。今では名張市に一軒だけとなった「新町温泉」です。入り口の松の木が、銭湯の佇まいに風情を添えています。

明治6(1873)年の創業で、県最古の銭湯。汲み上げた地下水を薪で焚き続けるのは、4代目の脇本 俊彦さん。高校を卒業してすぐに、体の弱かった父親に代わり、70年間、地域のお湯を守ってきました。「小学校の時にはリヤカーひいて手伝っていましたしね。最盛期にはこの辺りで9軒の銭湯があったのを記憶しています」。現在の建物は昭和33(1958)年に建て替えられました。「せっかく新品にしたのに、翌年の伊勢湾台風で被害を受けて、ボイラー設備が浸かりましてな。一年間は商売できませんでした」と当時の苦労を振り返ります。

入り口の重厚な下駄箱も必見です。アユを捕えた瞬間の鵜をモチーフにしたアルミ製の下駄箱は、まるで工芸品。正面には名張らしく赤目滝のタイル絵を飾り、上がり框(かまち)もレンガ色のタイル製。「今ではタイルを探しに隣町まで行かないといけません」と脇本さん。脱衣場は〝お釜形ドライヤー〟(ハンドドライヤーもあり)、マッサージチェア、体重計が並び広々としています。

浴室は京都式で、男女湯を仕切る壁沿いに浴槽が配置されています。入り口そばの浅湯には、タイル絵の鯉が泳いでいます。ほかに電気風呂、超音波のジェット風呂、薬湯は漢方で日替わり。スチームミストサウナは週に一度(土曜日)稼働しています。洗い場には珍しいタイル製の腰掛けがあり、これは大阪に多かったスタイルのようです。

天井はアーチ型で明るく、天窓のついた大きな四角い湯気抜きで、開放感があります。

燃料となる薪に、かつて木屋町にあった材木屋で出たおがくずや木っ端を利用していましたが、手に入りにくくなったことから30年ほど前は重油でボイラーを沸かしていたこともありました。現在は、毎日軽トラおよそ2台分の薪を燃料に調達し、火の当番をしています。「愛宕の火祭り」で知られる近くの愛宕神社にも縁深く、毎年の祭りには松明用のヒノキの割り木を奉納しています。火の神様を大切に思う気持ちが、この銭湯を守り続けているのでしょう。

「来てくれるのは近くの人たちですな。ほとんどが常連さんで、あとはお風呂が壊れた人。シーズンには釣り人も寄るから、釣りの話が聞こえてきますんや」。銭湯営業を社会奉仕と笑う脇本さん。冬至にはユズ湯でおもてなし。香りを楽しんでもらおうと80キロ程のユズを用意し、こまめに入れ替えています。「ユズがたくさん採れたときは、正月の初湯にもいれとります」。

「こんばんは」「今日は冷えますなあ」「お先です」「おやすみなさい」とあいさつが心地よく、それに応える「いつもご利用、おおきにありがとう」の声。新町温泉の雰囲気は、番台に座る脇本さん夫婦の人柄そのものです。

お問い合わせ

「新町温泉」(月曜・木曜日定休)
TEL 0595-63-2581
営業時間／16時30分～21時
駐車場あり(7台)

鵜をモチーフにした下駄箱

松の木と煙突が目印

薪で湯を沸かす脇本 俊彦さん

浅湯に泳ぐ鯉のタイル絵

庭に育つユズの木